佐野ぬい

JOSHIBI no.174

昨日より今日、今日より明日。
一歩ずつ上がっていけたらいい。

「青の作家」として、世界に認められる画家である。同時に、半世紀以上を女子美とともに過ごした教育者でもある。パリへの憧れから絵に本腰を入れて以来、すでに60年以上。あらゆる困難を困難ともせず、地に足をつけて創作と向き合ってきた半生に迫る。

Photo 三部正博　Text 立古和智

01

もともと絵描きになろうなんて気は、なかったのです。絵を描くことは、生まれ育った青森県弘前市から東京、その先にあるパリへと羽ばたくための手段だったというか。13歳のときに終戦を迎えると、津軽にも外国の映画が山ほどやってきて、私はそれらの虜になりました。そしてパリに憧れた。でも50年代のことだから、いきなりパリへと旅立つわけにもいかず、いい案がないかと父に尋ねると「絵描きになるのがいいのでは？」という。今思えば、ずいぶん無責任な話ですよね（笑）。そんな経緯もあって、まずは女子美への進学を機に上京しました。絵描きになるのだから、卒業後も助手として学校に残り、25歳で結婚。子育てのかたわらで絵を描き続け、大学では教鞭もとりはじめました。結局、はじめてパリの地を踏めたのは1969年のときです。私はすでに37歳を迎えていました。これまでの人生を振り返ってみると、もちろん挫折をしたことはあるものの、困ったときには、必ず周囲の誰かが助けてくれました。芸術家は孤独でなければならないという意見もありますが、私はそうは思いません。大勢の人が行き交うにぎやかな家で育った

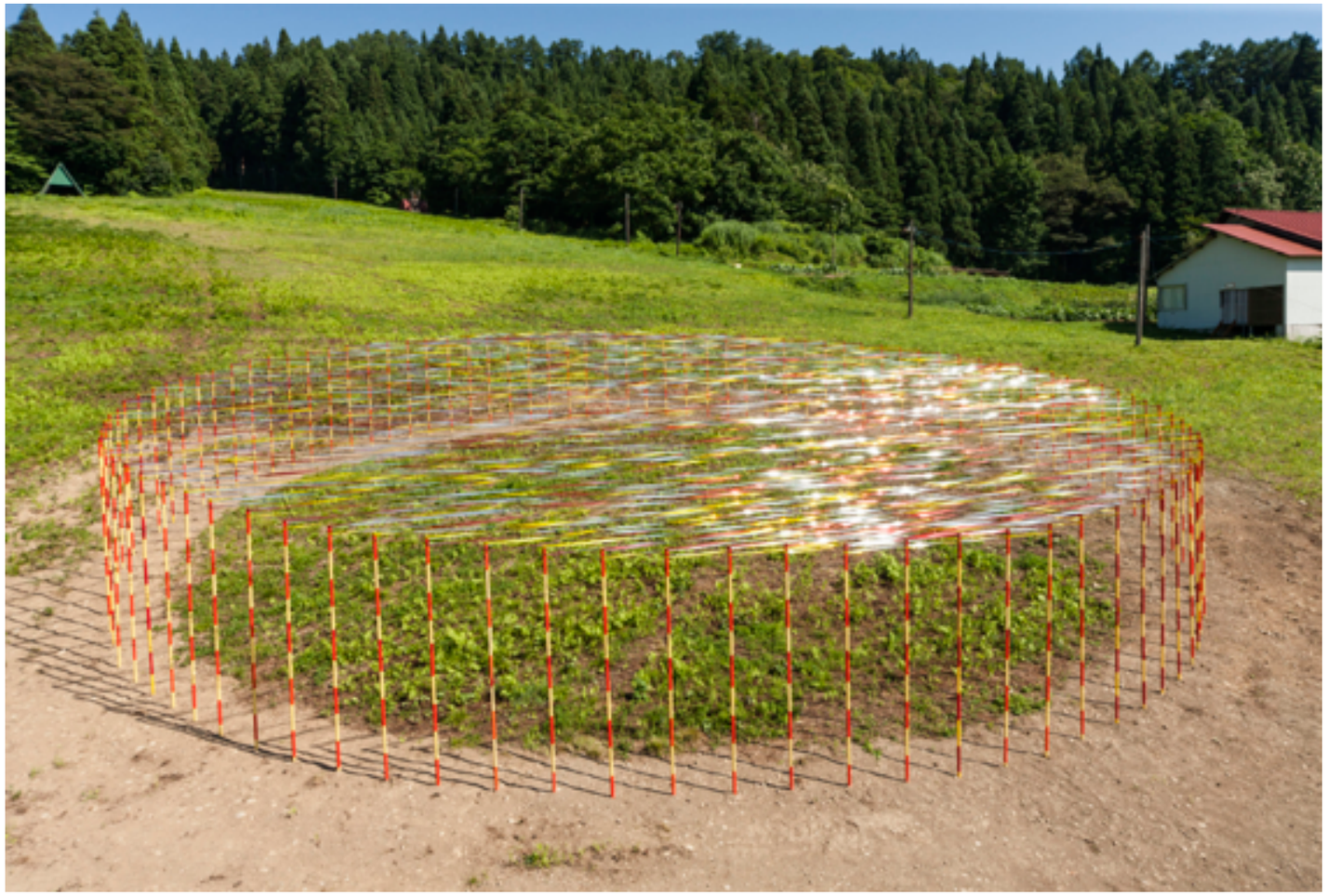
せいかしらね。ちなみに周りが助けてくれることと関係があるのかどうかはわかりませんが、私はすぐに人を信用してしまう。痛い目にあっても「私が悪かったのかな」くらいに留めて、恨み辛みを引きずらない。なぜか私の兄弟は、みんな揃って、そんな性格なのです。絵で賞を獲ろうという野心もありませんでした。そんなことを目標にすると苦しいじゃないですか。ただね、作風については考えたことがあります。私は青を基調とした絵で「青の作家」と呼ばれてきましたが、それは意識的に主張してきたのです。単に「絵描きです」と名乗っても覚えてもらえませんから。編集者だった夫も「代名詞があったほうがいい」と言うし、昔から青い絵ばかり描いてきたから、キャッチコピーみたいに、そう添えたわけです。そういえば、みんな「天然の青」っていいますが、実際のところ空にも海にも色はありません。最初に目に届く光線が青いだけ。私が好きなのも、そんな透明な青です。だから青を塗るときはゴテゴテとは重ねない。かの寺山修司は「青という字を書くと落ち着く」と言いましたが、私も青を塗るときは心地がいい。気持ちが楽です。ほかの色を使うときとは違って、青だと際限なく筆が動きますし、青だけでもすべてを表現できるつもりで描いています。描けなかった苦労といえば、忙しいときや、子育てに奔走していた時期ですね。それでも、いかに自分をキャンバスに向かわせるかが大事。たとえばアメリカの抽象表現主義のように、キャンバスに線を一本引くだけの絵にする。代わりにキャンバスを前にするまでは、ひたすら考えるのです。子育をしているときも、夫とともにテレビを前にしているときも。そんな風に自分を困らせない工夫をしてきました。人生、苦労だと思ったらつまらないですもの。なんだって自分なりに楽しまないと。そして絵を楽しみ続けるために一番大切なのは健康です。何かを観ていて「描ける」と感じる瞬間がある。それこそが私にとっての良い健康状態。美しいと感じるセンサーが働いてくれる状態です。それを維持するには、毎日おいしいものをいただくことが一番。せっかく食事をするなら、一食一食を大事に楽しまないと、もったいないですしね。それは絵についても同じです。ひとつ描く毎に「自分らしく、人とは違うものを」と願うばかり。ピカソですら「明日描く絵が一番すばらしいのだ」と明言していた通り、どれだけ描いても満足することはありません。ほんと絵って正体不明。思い通りになんていかないのですから。けれども、それこそが絵の魅力。今日より明日、明日より明後日、一歩ずつ階段を上っていけたらいい。ずっと探求していく。そんな風に、正体不明に向かい続けられることこそが、私のよろこびなのです。

佐野ぬい

洋画家。1932年青森県弘前市生まれ。1950年代より青色を基調とする作品で「青の画家」と称される。1955年、女子美術大学芸術学部の洋画科を卒業。その後、助手、専任講師、助教授、教授、大学院教授として後進の指導にあたる。2007年から2011年には、第16代女子美術大学学長を務める。現在でも個展、団体展、グループ展などで、コンスタントに作品を発表。1986年と2011年には紺綬褒章を、2012年には瑞宝中綬章を受賞。そのほかにも受賞歴は多数。

「大地の芸術祭」を支えることで育まれるもの。

175組のアーティスト、1200人を越えるサポーター、48万人を越える来訪者。昨年夏、越後妻有で開催された「大地の芸術祭」だ。総合ディレクターである本学・北川フラム教授に、女子美生がここでサポーターを務める意義を聞いた。



ジルヴィナス・ケンピナス「Kakashi（案山子）」©Osamu Nakamura

2000年のスタート以来、昨年夏で5回目の開催を迎えた「大地の芸術祭」。越後妻有の里山に内在するさまざまな価値を、アートを媒介として広く発信しながら、この地域を再生へと導いてきた、世界的なトリエンナーレだ。本芸術祭の総合ディレクターである北川フラム教授は、学生がこへび隊（サポーター）としてここに携わる意義を次のように説く。

「普通のボランティアとは異なり、ここでは主体性が求められます。正直いって大変ですが、ここを経ることで学生たちの意識はガラッと変わります」

アーティストとしての将来、あるいはキュレーターなど、アートを支える側に立つ今後。いずれを夢見たとしても、最先端のアートを間近にし、その創り手の生き方や考え方を、肌感覚で学んでいける意義は、計り知れないだろう。

「ここで鍛えられた後、作家への道を歩み出した女子美の卒業生の中には、石塚沙矢香さん（2004年絵画学科洋画専攻卒）がいます。ほかにも名高い美術館への道がひらけた人もいます」

これまで多くのこへび隊が、作家や地元の人たちと一体となって切り盛りしてきた21世紀型の芸術祭。アートの力で地域を活性化した実績は、近年、海外でも高く評価されている。

「やっぱりアートには可能性がある。人々を元気にする力があるのです」

クリスチャン・ボルタンスキー「No Man's Land」©Osamu Nakamura

©Takenori Miyamoto+Hiromi Seno
本学の卒業生、石塚沙矢香さん作品「うかのめ」。女子美に在籍していた頃、大地の芸術祭のサポーター、こへび隊を経験。その後、2009年には作家の立場で、本芸術祭に参加。

©Osamu Nakamura

©Osamu Nakamura

©Osamu Nakamura

©Osamu Nakamura

「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」とは

越後妻有（新潟県十日町市・津南町）の振興を目的として、2000年より夏に開催されてきた国際的なトリエンナーレ。東京23区よりも広大な里山を舞台に、地域に内在するさまざまな価値をアートを媒介に発信。新たな芸術祭のモデルとして、世界的な評価を得ている。

高山村を元気にする、女子美生の取り組み。

長野県高山村、須高ケーブルテレビ、そして女子美。三者のタッグで運営してきた「高山村プロジェクト」という名の地域づくり。羽太謙一教授（メディア表現領域）の指導の下、当プロジェクトを支える3、4年生が、その意義を振り返る。

「こ　の村を女子美の“高山村キャンパス”として使ってください」。村長からの、そんな口説き文句に背中を押されて幕を開けた「高山村プロジェクト」。日本の原風景を今に残す、この美しい農村を盛り上げ、広く知らしめていくこの取り組みも、2012年で7年目を終えた。ここで核となるのは女子美生の「デザインとアートの力」を活用すること。実際スタート以来、実施や商品化という形で実を結んだプロジェクトは17を数える。なかでもわかりやすい例が、現在にまで続く「バスストップギャラリープロジェクト」。2006年に、バス停7ヵ所の外観を鮮やかに彩ったことが評価され、2011年には大型バス停の内装を、その翌年にはかつて外観を手がけた7ヵ所の内装を手がけるにいたる。

「バス停は公共物。だから女子美の作品としても目立つ。おかげで私たちを理解してくれる人も増えた」（羽太）

バス停に限らず、すべてのプロジェクトに共通するのは、学内での創作とは異なりクライアントが存在すること。すると予算の制約があるのはもとより、シビアな要望が飛び交うことは想像に難くない。2012年度に温泉宿のおみやげを提案するプロジェクトに携わった3年生たちも「ハードルが高くて、刺激になる」「責任が伴うものづくりには格別の緊張感がある」と口を揃える。

「村の人たちはデザインやアートの専門家ではないため、普段通り専門用語を使うとコミュニケーションにならない。それに学校の課題とは異なり、自己表現などは、二の次になる」（3年生）

一方で「卒業後、社会に出ていく前の予行演習の場にもなっている」と4年生。

「相手を知りながら、自分を出す」との言葉通り、発注側と受注側がうまく歩みより、力を発揮していく様子は、社会でのものづくりにも通ずる。何より学生のうちから自らが手がけたものを世に送り出し、その反応を目の当たりにできることには大きな意義がある。

「温かい村の人たちとの交流も楽しい。仲間たちとともに村に泊まり、雑魚寝をしたことも、いい思い出」（3年生）

これまでは村の産業の一部分に対して携わってきたが、今後は「新製品開発とブランディング、パッケージまでを系統立てて手がけたい」と、さらなる意欲をのぞかせる羽太教授。フレッシュな感性を、地域の活性化に生かしていく取り組みは、いまだ序章を終えたばかりだ。

温泉宿みやげ

3年生が4チームに分かれて、高山村にある4カ所の温泉旅館で販売される商品を企画。旅館ごとのニーズをくみ取りながら、子どもでも楽しむことのできる、ご当地限定のおみやげを提案していった。

大巌（おおいわ）そばパッケージ

高級感があること、高山村の自然を感じられること、手に取りたくなること。これらが条件となった、そばのパッケージデザインを3年生が担当。予算の制約から、高級感を演出できる和紙は使えなかったが、そこは優れたデザイン力でフォロー。提案に先立って高山村でそば打ちも体験した。

バスストッププロジェクト

2006年にペイントされた外観をベースに、2012年には内部を彩ることに。テーマは「高山村との調和」。あらかじめ学内でペイントしたボードをバス停の内部に配置した。さらには、ここで使用する“ゆるキャラ”の開発も並行。当初は期間限定での展示予定だったが、長期展示へと変更された。

図工ワークショップ

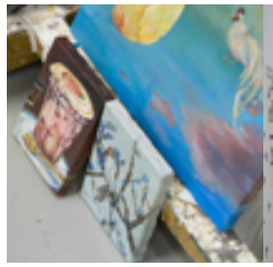
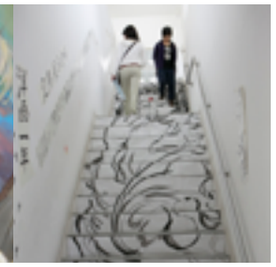
安全で簡単、45分で完成する、子どもたちが集中して楽しめる。これら3つのリクエストを受けて、プラ板をトースターで加熱してアクセサリーを作るワークショップを4年生が実施。子どもたちが作ったアクセサリーの一部は、バスストッププロジェクトに活用された。

サイン計画

メディアアート造形研究領域の大学院生が中心となって手がけた、サイン計画を含むグランドデザイン。ここでのコンセプトは、高山村の景観や特色をデザインに生かしていくこと。このプロジェクトは2013年度以降も継続されていく予定だ。

女子美祭 2012

10月26日～28日、女子美祭が開催されました。全学生の作品展示をはじめ、自主展示、フリーマーケット、サークルや有志による模擬店などが両キャンパスを彩りました。相模原キャンパスでは土屋アンナさんの講演会、三浦涼介さんのステージを開催。杉並キャンパスでは、美しすぎる日本画家としても有名な卒業生の松井冬子さんが講演会「冬子の美術狩り」を開催し観客を魅了。大盛況のうちに幕を下ろしました。

100周年記念大村文子基金

「100周年記念大村文子基金」は、創立100周年記念事業の一環として、平成11年に大村智理事長夫妻からの寄付を基に、文子夫人の名前をいただいて設立しました。この基金によって運営されている4つの賞、そして本基金の目的のために功績のあった者、及び団体に贈られる「大村特別賞」が以下の方たちに授与されました。

平成25年度 第14回
女子美パリ賞
［パリ国際芸術都市アトリエ使用権］
［副賞 100万円］

藤倉明子
平成10年芸術学部絵画科日本画専攻卒業
平成12年美術研究科修士課程美術専攻日本画研究領域修了

『飛行船』
H1305×W1620mm /2011年

平成25年度 第7回
女子美ミラノ賞
［大学借上げマンション1年間貸与］
［副賞 100万円］

盧 暎雅（ノ ヨンア）
国籍 韓国
平成19年芸術学部
ファッション造形学科卒業

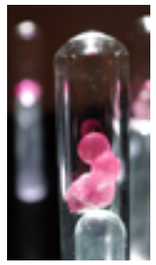
『TRI CLUTCH』
serpent pattern cowhide,cowhide,suede
H180×W300×D60mm/2011年

平成24年度 第12回 女子美 制作・研究奨励賞 ［副賞各20万円］

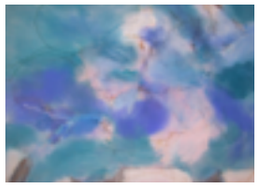
多田えり佳
平成6年本学付属高等学校卒業
平成10年芸術学部工芸科卒業

『Weaving the Time-Kutsu「時を 編む」』
ガラス/H100×W600×D600mm/2012年

前田彩子
平成8年
芸術学部
芸術学科卒業


『METAMORPHOSIS 0』
インスタレーション/2011年

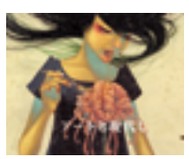
山口牧子
昭和61年芸術学部
絵画科日本画専攻卒業


『Wings No.2』
顔料、メディウム、蜜蝋、パネルに綿布 /H1820×W2593mm/2011年

平成24年度 第14回 女子美美術奨励賞 （留学生対象）［副賞各10万円］

【大学院】
李 珠睨（イ ジュヒョン）
国籍 韓国
美術研究科美術専攻博士後期課程
芸術文化研究領域 3年次在籍
「共感覚の現象と発生レベル：色字共感覚および色聴共感覚」、他 論文

【大学】
林 リラ（リム）
国籍 韓国
芸術学部芸術学科
4年次在籍


『アートと 現代し』 カタログ

【短期大学部】
潘 周伶（パン ジュヨン）
国籍 韓国
造形学科美術コース
2年次在籍

『蘇る』 木

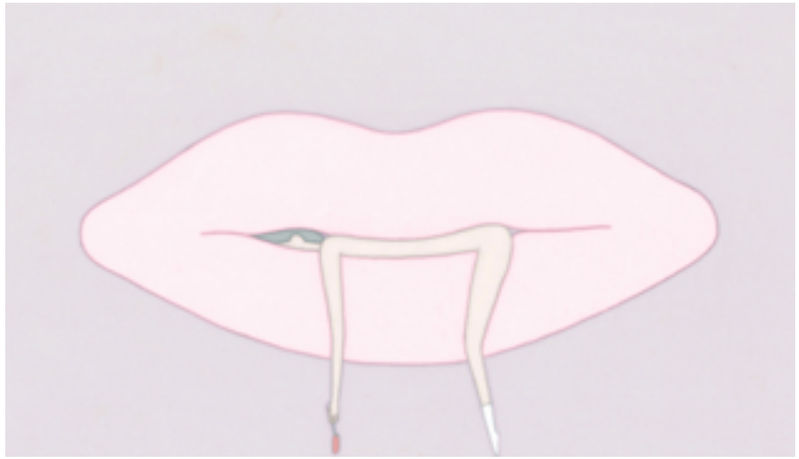
平成24年度 大村特別賞 ［記念品］

島峰 藍
平成20年本学付属高等学校卒業
平成24年芸術学部デザイン学科ヴィジュアルデザインコース卒業
選考理由：東京2020オリンピック・パラリンピック招致ロゴのコンペにて、グランプリを獲得。

「女子美術大学 にこぷん」
選考理由：全国的に展開するアート＆デザインによる環境活動が高く評価されている。

「産学連携 丹後ちりめんプロジェクト」
選考理由：京丹後市と協力し丹後ちりめんを使った製品企画・提案を実施し、メディアで話題に。今後の活動に期待が持てる。

「書の甲子園」入選・入賞 該当者
選考理由：世界の高校生が書道の腕と感性を競い合う「国際高校生選抜書展」にて個人賞、団体賞を獲得。



水尻アニメーション、甘美な世界を展開

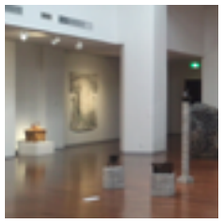
在学時からアニメーション作家として始動し、現在も幅広い分野で映像作家として活躍中の水尻自子さん（芸術学部デザイン学科卒業）の作品『布団』が第14回広島国際アニメーションフェスティバルのコンペティションで「木下蓮三賞」を受賞しました。8月23日～27日の会期中に上映された受賞作『布団』は、女性の持つくちびるの柔らかさや、足が作る美しい曲線などを追求した作品です。甘美感漂う動きの表現を、審査委員も高評価。「一本の作品の中に繊細さ、優美さ、そして官能が表現されている」と絶賛しました。

「受賞作にはストーリーやキャラクターは存在せず、自分の頭の中にある感覚をイメージ化したものなのです。感覚を重視して作品を作るので、言葉で説明することが難しいところもあります。それでも観客の方の体の中で、作品と共感する部分が見つけていただければ嬉しいですね」と水尻さんは話します。映像作家としての顔とは別に、本学短期大学部造形学科デザインコースの助手という顔も持つ水尻さん。実はこのふたつの顔に加えて「shiripro」というアニメーション・映像制作を中心とした制作チームを立ち上げ、活動しています。広島国際アニメーションフェスティバルは、受賞作家が世界的な映像作家として成功することが多く、なかでも「ヒロシマ賞」を受賞した加藤久仁夫さんがその後、アカデミー賞で短編アニメ賞を受賞したことは有名なエピソードです。世界中の映像作家の登竜門である賞を受賞した水尻さんの今後の活躍に注目です。

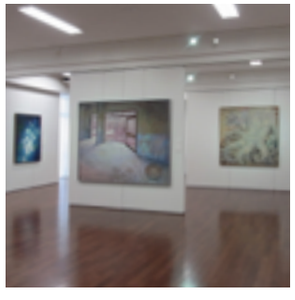
沖縄県立芸術大学と教育・学術交流に関する協定を締結

このたび本学は、沖縄県立芸術大学と連携協力に関する教育・学術交流協定を締結しました。9月16日には本学杉並キャンパスにて、両大学学長の出席のもと協定の調印式が行われました。

この締結と併せて、両大学の大学院研究科長の出席のもと、大学院修士課程における単位互換に関する覚書の調印も行われました。この単位互換プログラムは大学院のみ本年度後期授業より、開始しています。その他にも交流展など、本協定に基づく交流や活動を行うことで、学ぶ環境が大きく異なる大学の学生たちが新たな刺激を受け制作・研究活動に広がりが生み出されることを期待しています。



本協定の締結を記念した両大学大学院生の作品展が9月15日～10月6日、杉並キャンパスの女子美ガレリアニケにて開催されました。この展覧会には、沖縄県立芸術大学大学院生12名、本学大学院生19名が作品を出品。平面や立体作品など、それぞれの個性あふれる作品が会場を埋め尽くしていました。会期初日の15日には、杉並キャンパスのカフェテリアにてオープニングパーティーが開催され、展覧会に華を添えました。当日、出品した学生たちは初顔合わせではありましたが、たちまち打ち解け親睦を深めていました。

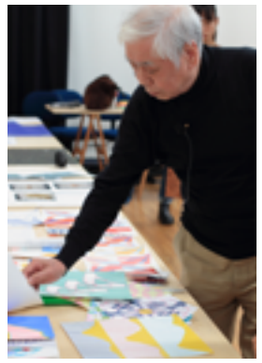


04 女子美デザインの腕時計 シブカル祭でお披露目

チックタック（渋谷パルコ店）と本学がコラボレーションした腕時計がシブカル祭（10月19日〜29日）で展示されました。制作条件は毛糸素材で作る“Knit-SHOCK”の使用。コンペで選抜された短大生、専攻科生10名の作品が店頭を飾りました。鳥獣人物戯画をモチーフにしたもの、リボンをあしらったガーリーなものなどが人々の目を楽しませました。

03 第13回 美術教育フォーラム開催

8月3日、本学主催の美術・図画工作の効果的な授業方法について講演・事例発表などを通して考える美術教育フォーラム「エビデンスベースド・アートエデュケーション－実証にもとづく美術教育－」を国立オリンピック記念青少年総合センターで行いました。このフォーラムは今回で13回目。小・中・高等学校の美術科教員の方などが参加し、活発な意見交換を行いました。



01 「わび・さびの要素」を 見つめ直すデザインの授業、開講

デザイン・工芸学科客員教授、仲條正義先生の特別授業が10月20日、相模原キャンパスにて行われました。今年の課題は『新しい「和」の風呂敷・スカーフ』。当日の授業にはヴィジュアルデザイン専攻の学生の他、多くの聴講希望の学生が出席、仲條先生の講義に聞き入っていました。「デザインは、いずれ消費されて飽きられるもの。その時こそ、日本的な「わび」「さび」といった要素がデザインに必要になるような気がするんです」と話され「もっと日本的なものを見直してほしい」と課題の意図をお話しされました。講評終了後にはグランプリ作品を選出、ヴィジュアルデザイン専攻3年山田一穂さんの作品が選ばれました。山田さんの作品を「とてもおしゃれで、文句の言いようがない作品」と仲條先生も絶賛。グランプリ受賞を聞いた山田さんは「先生方や友達からアドバイスをいただけたことがグランプリ受賞の理由だと思います」と感激もひとしおの様子でした。

仲條正義

1988年東京生まれ。'56年東京藝術大学美術学部図案科卒業。資生堂宣伝部、デスカを経て'61年仲條デザイン事務所設立。主な仕事に、資生堂企業文化誌『花椿』、東京都現代美術館、松屋銀座のロゴマーク、資生堂パーラー銀座本店ショップのパッケージデザインなど

06 6000個のあかりで 人の心をつなぐ

10月13日、新潟県柏崎市谷根（たんね）で「たんねのあかり2012」が開催されました。2009年開始から引き継がれ今年で4年目。「あかり」と「そこにあるもの」をテーマとしたアートイベントで、地域の方々と女子美生が交流しながら続けてきました。今年は6000個以上のあかりが谷根地域の夜を彩り、約8000人の来場者を迎えることができました。

05 30×30cmの世界を 女子美生がつくる

新宿のコニカミノルタプラザにて「ピンクリボン女子美アート作品展」が9月28日〜10月9日に開催されました。学内公募で集まった作品は319点。会場には、乳がん撲滅・早期発見を啓蒙するピンクリボンの活動を女子美生の独自の視点で表現した作品が勢ぞろい。規定サイズで制作した個人作品の他、映像や服飾作品も展示され、会場は「女子美カラー」に染まりました。

02 女性の体と インナーウエアの関係を追究

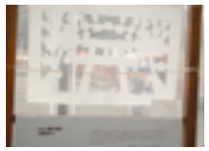
株式会社ワコールのご協力のもと、女性の体とインナーウエアとの関係性について探る授業が実現しました。受講したのはファッションテキスタイル表現領域3年生。実際に市場調査を行い、そこからわかる結果をもとに商品を企画、提案。講師を務めたワコールのクリエイティブプランナー松村昭子さんは、女子美生の独創的なデザイン案の数々に感動されていました。

NEWS & TOPICS

14 八咫鏡（やたかがみ）仕様の衣装で、よさこいを舞う

創立110周年を記念し結成された「女子美よさこい」チーム。8月25日に行われた原宿表参道元氣祭スーパーよさこいに出場、本学オリジナルの斬新な衣装で注目を浴びました。校章の八咫鏡がちりばめられたフード仕様の衣装で踊るチームメンバーは、観客の目をひきました。

13 「きりこ」が伝える人々の思い



東日本大震災の大津波で町全体が被害にあった南三陸町。町民の方々の記憶や物語をともに共有し、復興活動の一環とするプロジェクト「南三陸福幸きりこ祭」にアートプロデュース表現領域1・2年の学生が出展協力をしました。縁起物を切り抜いた半紙、きりこが晩夏の町を飾りました。

16 女子美スタイル2012 東京都美術館で開催

女子美スタイル2012　113年ー愛と誇りを抱いてー
日時：2013年3月2日（土）～8日（金）　9:30～17:30
（最終日は12:30まで／入館は全日終了の30分前まで）
会場：東京都美術館（東京都台東区上野公園8-36）
大学・短大・大学院の卒業・修了制作作品の中から選出された作品と付属高校の卒業制作作品を展示する展覧会です。

15 平成24年度 卒業制作展／修了制作展 お知らせ

大学　芸術学部　相模原キャンパス
短期大学部　杉並キャンパス
3月14日（木）～17日（日）　10:00～16:00

女子美術大学大学院修了制作作品展
相模原キャンパス　女子美アートミュージアム
3月10日（日）～20日（水・祝）　10:00～17:00（入館は16:30まで）

17 公募展受賞者紹介

碧い石見の芸術祭　全国美術大学奨学日本画展2012
準大賞

慶野智子　芸術学部美術学科日本画専攻3年

第48回 神奈川県美術展
入選 ＜平面立体部門＞

岩崎綾乃　芸術学部立体アート学科4年
川原めい　芸術学部美術学科立体アート専攻3年
荒木美由　大学院美術研究科修士課程美術専攻立体芸術研究領域2年
古井彩夏　大学院美術研究科修士課程美術専攻立体芸術研究領域2年
帆足枝里子　大学院美術研究科修士課程美術専攻立体芸術研究領域2年

第22回 シルク博物館　全国染織作品展
入選

新田 幸　大学院美術研究科修士課程美術専攻工芸研究領域（織）1年

第76回 新制作展
入選 ＜スペースデザイン部＞

千葉真由子　大学院美術研究科修士課程美術専攻立体芸術研究領域2年

第6回 全国きものデザインコンクール
入選

原 祥子　芸術学部デザイン・工芸学科工芸専攻（テキスタイルコース）3年

第39回 創画展
入選

山村 遥　芸術学部絵画学科日本画専攻4年

09 ちりめん素材のポーチやワンピース可愛くデザイン

丹後ファッションウィーク開催委員会との連携協定締結から、被災地へ風呂敷を贈るなどの活動を行っている丹後プロジェクト。今回は女子美生の感性で丹後ちりめんの新たな魅力を広げることを目的に、委員会から製品企画の依頼を受けました。約1年間の準備期間を経て9月9日にアイデア発表会が行われ、製品化実現へ向け動き出しました。

08 未来のアーティストのための「HOTサンダルプロジェクト」

「島での生活が、今までの価値観を変えてくれました」と話すのは大学院修士課程日本画研究領域の下村渚さん。下村さんは8月の約1ヶ月間、香川県丸亀市塩飽（しわく）諸島に他美大の学生27名と滞在、島民の方々と交流をしつつ作品を制作・発表する「HOTサンダルプロジェクト」に参加しました。「この経験を今後どのように作品に反映できるか楽しみです」と話してくれました。

07 届け、苺にこめられた思い

アーティストとして活躍中の野口香子さん（絵画科日本画専攻卒業）が、10月6日から約3ヶ月間、折り紙で作られた苺を用いたインスタレーションをボーラ美術館で行いました。東日本大震災をきっかけに制作されたこの作品。4500個もの苺と国内外から寄せられた「苺の塗り絵」などが一緒に展示されました。生命を主題にした「祈り」の思いが伝わる作品です。

12 子どもたちの夢を叶える基金に協力

メディア表現領域3年の七川加奈子さん、丸島葵さん、森双葉さんが2012年に創設された「杉並区次世代育成基金」のステッカーをデザインしました。このステッカーは基金に賛同し寄付をした方々に贈られます。女子美とはなじみの深い杉並区のキャラクター“なみすけ”をモチーフに青空、虹、雲をレイアウトした6種類のデザインを展開しています。

11 フェルトの蝶表紙を飾る

ファッションテキスタイル表現領域の助手を務める渡部直也さんの作品が、SHISEIDO THE GINZA発行の「ギンザドキドキ Vol.006」の表紙を飾りました。女優の壇れいさんの髪を飾る蝶のブローチが渡部さんの作品です。学生時代から作り続けている作品をさらに進化させたいと話す渡部さん。今後の活躍に期待しています。

10 デザインのテーマは「HOUSE」「PLAY」

10月30日～11月5日、プロダクトデザイン専攻と環境デザイン専攻の学生が東京デザイナーズウィーク2012に出展しました。今回は両専攻ともワークショップを開催。プロダクトデザイン専攻では「真空成型」という方法を使い、パーツを組み合わせてオリジナルのお面を作るというもの。会場は親子連れが多くつめかけ、大変にぎわいました。

アンコールのヴィーナス
―BAKU斉藤の視線―

JAM 展覧会報告　PICK UP

9/8(土) → 10/21(日)

「日本・カンボジア交流促進年」にあたる本年、当館では日本とカンボジアの交流を祝い、世界最大級の文化遺産であるアンコール遺跡群の撮影をライフワークとしている写真家・BAKU斉藤氏の遺跡写真展を行いました。

本展覧会では、自然とアートが共生する美のかたち、ヴィーナスと尊顔の神秘性、幻の遺跡と呼ばれる「バンテアイ・チュマール」、水の恵みと文明などに焦点をあてました。なかでも本学になじみ深いヴィーナス像の写真を多数ご紹介しました。その多様な装飾性は特に印象深くご覧いただけたのではないでしょうか。

さらに、平山郁夫シルクロード美術館が所蔵する、寺院建築やヴィーナスを精巧に表現した儀礼用の絣(かすり)をご紹介しました。

今回の展示を通して、カンボジア・アンコール遺跡群の空気を味わっていただけたことと思います。

JAM

女子美術大学同窓会企画展「刺繍をまなぶ」

11/3(土・祝) → 11/25(日)

本学は、明治33年の創立当初より刺繍科を設置、日本刺繍を基本とした教育に取り組んできました。本展覧会は同窓会が企画し、作品や資料を通じて本学の刺繍教育とその展開を紹介しました。

版の時間 ／ Age of Prints

12/1(土) → 12/16(日)

大学版画学会が企画し、若手作家14名の作品を展示しました。版画技法のジャンルを横断し斬新な応用表現、映像や写真を取り込み変化させるデジタル表現やオルタナティブな表現など多様化した版画表現を紹介しました。

女子美ガレリアニケ

沖縄県立芸術大学×女子美術大学 教育・学術交流協定締結記念 大学院生 作品展

9/15(土) → 10/6(土)

沖縄県立芸術大学大学院生12名、女子美術大学大学院生19名の平面、立体、映像作品等を展示。

ドキュメンタリーアニメーション「琉球王国ー MADE IN OKINAWA」展

10/13(土) → 10/28(日)

沖縄の歴史と心を描いたドキュメンタリーアニメーション作品と、制作のために描かれたスケッチや絵コンテ、調査研究に使用した文献等を展示。

「トルコの伝統的刺繍とオヤ」&「ビーズの縁飾り」展

11/5(月) → 11/17(土)

手工芸の盛んなトルコの伝統的刺繍作品、スカーフの縁を飾るオヤの貴重なアンティーク作品とともに、日本流にアレンジしたオヤを展示。

平成24年度 女子美術大学短期大学部 退職教員記念展

11/24(土) → 12/4(火)　吉武研司教授
12/6(木) → 12/15(土)　小川正明教授
12/17(月) → 12/22(土)　小山容子助教

平成24年度女子美術大学短期大学部を退職される実技系教員の退職を記念して開催。

JAM

1/7(月) → 1/24(木)

平成24年度　退職教員記念展

平成24年度退職の実技系教員（江川澄子、岡崎和美、小川正明、奥村靱正、小野克子、小山容子、河邑厚徳、篠崎京子、中嶋猛夫、宮城真、吉武研司）の作品を紹介します。

3/10(日) → 3/20(水・祝)

平成24年度　女子美術大学大学院修了制作作品展

平成24年度大学院美術研究科修了生による展覧会です。

女子美ガレリアニケ

2/8(金) → 2/22(金)

遠浅／泥沼

アートイベントなどで出会った人々によってゆるやかに始まった活動「泥沼コミュニティ」による企画展。多様化する現在のコミュニケーションを「遠浅／泥沼」というテーマを通して考え、作品や活動アーカイブ、関連イベントとして展開します。

歴史資料展示室

1/16(水) → 7/15(月・祝)

佐藤志津と私立女子美術学校再興展

本学の初代校主・第2代校長を務めた佐藤志津の生涯と本学における活動を紹介する展示です。

女子美術大学広報誌

発　　行　学校法人女子美術大学
〒166-8538
東京都杉並区和田1-49-8
企画・編集　総務企画部広報課
監修担当　山本吉男・林規章
デザイン協力　株式会社 Kitchen Sink.
印　　刷　株式会社 ヒーローズ
発 行 日　2013年1月5日

©2013 学校法人女子美術大学

広報課では女子美のニュースを募集しています。お気軽に下記までお知らせください。また、本誌の定期購読をご希望の方はお送り先を広報課までご連絡ください。

広報課
TEL 042-778-6123
E-mail prs@venus.joshibi.jp
URL http://www.joshibi.ac.jp